

---

# 氷点下の青空

カリバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷点下の青空

### 【Nコード】

N9843E

### 【作者名】

カリブー

### 【あらすじ】

この春に中学3年生になった一条兼太は、クラス替えであまり友達のないクラスに配属されてしまった。その上最初の自己紹介や体育の授業で失態を犯して友達作りに失敗し、嫌なクラスメートに目をつけられてしまう。どんどん憂鬱になる一方の学校生活を、彼は無事卒業まで乗り切ることができるのだろうか？

朝、僕は久しぶりに七時ちょうどに目を覚ました。学校に遅刻しないギリギリの時間だ。いつものようにベッドから出て部屋のカーテンを開けると、窓からは家の前にある空き地が見えた。もう四月だというのに、空き地には疎らに雪が残っていた。空に目を移すと、昨日の天気予報の通りやや曇りがかっていた。だが気温は平年より高くなるらしく、残雪は今日で殆ど溶けるだろうということだった。

学校は今日から新年度だった。僕は学校に着くなり、はやる気持ちを抑えながら三階まで階段を駆け上がる。そして去年と同じように、各教室の前に貼り出されていたクラス分けの名簿を一組から順に確認していった。この中学校はこのあたりでは比較的規模が大きく、一学年が八クラスで構成されている。その中の五番目の教室の名簿に、僕は自分の名前を見つけた。

名簿に載っている他の名前を見てみたが、仲の良い友達と言えるような人は見当たらない。僕は少し落胆したが、八クラスもあるのだから仕方がないだろうと考えて三年五組の教室のドアをくぐった。

教室内は生徒たちの話し声でとても賑やかな雰囲気となっていた。新たに会話に割って入ることは憚られたので、とりあえず自分の席に座ることにする。

それから五分も経たないうちに、始業を知らせるチャイムが鳴った。そして、担任の先生入ってきて朝のホームルームの開始を告げる。彼はまだ私語をしている生徒に注意をして、それから簡単に自己紹介をした。三十代半ばの大柄な男性で、名前は木下というらしい。

彼は今日の日程の説明を済ませると、始業式の会場である体育館

に向かうため、生徒たちに廊下に出て出席番号順に並ぶように指示した。生徒たちは再び賑やかに話を始めて、そろそろ廊下に出て行く。僕もその流れについていくことにした。

廊下に出ると、他のクラスの生徒たちも並び始めているところだった。廊下に出ている生徒の多くは話をしており、細長い空間に何百人もの人の声が響いて思わず耳を塞ぎたくなるくらい騒がしかった。

僕は出席番号が一番前だったので、前のクラスである三年四組の並んでいる様子がよく見えた。そこには、二年生のときに同じクラスで割と仲の良かった津野君の姿があった。彼も同じクラスの人と話をしており、すっかり新しいクラスに溶け込んでいるようだ。それを見て僕は、まるでこの廊下で声を発していないのは自分だけであるかのような感覚に陥った。

体育館に着いても、周囲の騒がしさは変わらなかった。そして、僕がまだ一言もしゃべっていないということも変わらないままだった。

僕は何だか怖くなった。一年生のときも二年生のときも、こんな気持ちになったことは一度もなかった。今までは自然と新しいクラスに溶け込んで、友達もいつの間にか出来ていた。

だが今年は明らかに違う。僕の認識が甘かったのかもしれない。本当は他の人はみんなクラス替えの度に必死で友達を作ろうと努力していて、僕だけがそれに全く気付いていなかったのかもしれない。そんなことを考えていると、進行役の先生が体育館の脇に設置されたマイクの前に出てきて始業式の開始を告げた。周囲はとたんに静まり返る。僕は救われた気がした。

僕の気持ちをよそに、式は淡々と進行した。いつものように、まず校長先生が五分程度で型どおりの新年度の挨拶をして、それから生徒指導の先生が新学期の開始にあたっての注意と称して説教じみた話をした。普段の僕はこうした類の話を真面目に聞くほうだった

が、今日ばかりは話の内容があまり頭に入ってこない。

式が終了して、僕たちは教室に戻った。担任の先生がホームルームの再開を告げ、生徒たちに出席番号順で自己紹介をするように言った。悪いことに僕が一番目だった。

何を言うかじっくり考えることもできないまま、僕は立ち上がった。その瞬間、クラス全員の視線が集まる。僕はとりあえず、名前と去年所属していたクラスを言った。クラスメートたちの反応は特に無く、黙ってこちらに視線を向けている。

次に続ける言葉がなかなか浮かばず、少しの間が出来てしまった。心なしか周囲の視線が厳しくなる。僕は自分の顔が紅潮するのを感じた。部活をやっておらず、これといった趣味も無い僕には、これ以上話すことなど無いのだ。まるで自分の中身の無さを突きつけられたような気分になる。

僕はやっとの思いで口を開いて、大して本を読むわけでも無いのに趣味は読書だと適当に取り繕った。それから一年間よろしくというようなことを言って、軽く一礼してから着席した。クラスメートたちは表情を変えず、パラパラと乾いた拍手を送った。

他の生徒たちは、所属する部活の話や音楽やスポーツといった当たり障りの無い趣味の話をした。中には一発ギャグのようなことをして笑いをとる人もいて、クラスの雰囲気は徐々になごやかなものとなっていった。

全員の自己紹介が終わると、先生は適当に説明を加えながらプリントを配り始めた。僕は一番前の席なので、まず先生からプリントを受け取って自分の分を机に置いた。それから後ろを向いて残りを渡そうとしたが、後ろの人は周りと大声で話をしていて僕に気づいていない。このままでは埒が開かないので、僕は覚悟を決めて声を出した。

「あ、あの、プリントなんだけど……」

後ろの人はどうやら僕に気づいたようで、手だけを伸ばしてプリ

ントを取った。僕はなんとも言えない嫌な気分になったが、話に熱中しているのだから仕方ないと考えて暗い気持ちを頭の隅に押し込んだ。

この日は、先生が連絡事項を言った後すぐに解散となった。周りが数人のグループで楽しそうに帰宅していく中、僕は一人で帰った。

2

次の日は、一時間目からいきなり僕の苦手な体育だった。しかも最も嫌いな短距離走である。朝のホームルームが終わると、生徒たちはそろそろと教室を出て更衣室に向かった。更衣室では周りの生徒が楽しそうに話している中、僕は一人黙々と着替えなければならなかった。

着替えを終えてグラウンドに出た瞬間、僕は思わず身震いをした。雲で太陽が隠れている。雪はもう完全に溶けたが、この時期の朝のグラウンドはかなり寒い。

しばらくして授業開始のチャイムが鳴り、女子の体育の先生が一人で出てきた。彼はグラウンドをうろついている生徒たちに男女一緒に整列するように指示する。今日は男子の体育の先生が休みで、男女混合で体育の授業を行うとのことだった。

簡単な準備運動の後、すぐに百メートル走の練習が始められる運びとなった。今日は男女混合のため、出席番号順に男女それぞれ二人ずつがコースに入って走るといったことだった。

それを聞いて、僕は憂鬱になった。僕はとても足が遅く、男子の中ではいつもビリだった。その上女子にまで負ければ、きっとみんなにバカにされるに違いない。新しいクラスになってまだ二日目である。昨日の自己紹介での失敗に加えて今日も体育でも醜態をさらすということになれば、僕の第一印象は最悪だろう。

不安な気持ちになった僕は、スタート地点に立つなり自分と一緒に走るの誰なのかを確認した。男子は昨日僕がプリントを手渡し

た人だった。名前は確か吉良君だったと思う。昨日たまたま吉良君とその友人との会話を小耳に挟んだのだが、彼は去年まで陸上部に所属していたらしい。僕は彼に大差で負けるだろう。

肝心の女子は、一人は教室で席が隣の宇都宮さんで、もう一人はまだ名前を覚えていない人だった。

宇都宮さんには見覚えがあつた。確かテニスの地方大会で好成績を残したということで、去年の二期の終業式で表彰されていたような気がする。おそらく足もかなり速いはずだ。これは本格的に負けを覚悟しなければならぬ、と僕は思った。

先生はピストルを真上に向けて、ヨーイ、と大声で言った。僕たちはその合図で片足を引き、スタートの構えをとる。そして次の瞬間、ピストルの大きな音が広いグラウンドに鳴り響いた。

吉良君のスタートは抜群だった。やや出遅れた僕は、それでも彼に離されまいと必死で走ったが、その差はみるみるうちに広がっていった。僕は一生かかっても彼のように速く走ることは出来ないだろう。この圧倒的な差は、僕にそんな思いを抱かせた。

僕がだいたい半分くらいまできたところで、突然視野の端に人の背中が現れた。それが、二つ右のコースを走っている宇都宮さんのものだということはすぐに分かった。このままでは負ける。そう感じた僕は、気合を入れ直して走ることに意識を集中した。だが、宇都宮さんとの差は一向に縮まらない。ゴールがすぐそこまで来ている。体力的にはもう限界だった。しかし僕は極度の焦りから、無理をしてさらに足を速く動かそうとする。

次の瞬間、僕は右足をすべらせて前に大きく転倒した。額が地面に打ち付けられ、頭に衝撃が走る。かすむ視界の隅に、先ほどまで僕の後ろを走っていたもう一人の女子の姿を確認した。僕はこの四人の中でビリになったのだ。

頭を打った衝撃で意識がはっきりしなかったが、周囲がざわめいていることは良く分かった。ただっ広いグラウンドの隅で無様に倒

れている僕と、それを取りまく生徒たち。彼らの視線から僕を守るものは何もない。僕は痛みと惨めさで、思わず泣きたくなくなってしまった。だがここで泣いてしまつては、それこそ本当にこのクラスでの生活は終わりだ。

「あの……。大丈夫？」

突然耳に入つたその声に、僕ははつとさせられる。意識が完全に戻つた。

「立てる？」

僕の目の前に手が差し出された。僕は反射的にその手をとつて、立ち上がりながら視線を上げる。驚いたことに、僕に声をかけてくれたのは宇都宮さんだった。

僕が宇都宮さんに助けられて立ち上がった後、先生が駆け寄つてきた。先生は僕が額を擦りむいているのを見ると、すぐに保健室に行つて手当てをしてもらうように言つた。先生は付き添いが必要かどうかも訊いてきたが、もう歩くことは問題なく出来そうだったので、僕は一人で行けると伝えてグラウンドを後にした。

保健室での治療は十分ほどで終わったので、僕はまたグラウンドに戻ることにした。すると、校舎からグラウンドに出たところで、ちょうど友達数人と一緒にいる宇都宮さんと目が合った。僕は突然の出来事に一瞬固まつてしまつたが、ここはお礼を言わなければ失礼だと思い、なんとか口を開いた。

「えつと……。さつきは、ありがとう……」

「いや、部活でケガ人が出るのは慣れてるんだ。それにしても、たいたしたこと無くてホント良かったね！」

「うん……。あの、さ。宇都宮さんつて、去年、なんか表彰されてたよね。僕、宇都宮さんのこと見覚えあるなあって思つて……」

「ああ！ 去年の新人戦ね！ 私、地方大会で準優勝して、全国行つたんだ。結局、全国じゃ全然ダメだったけど……」

「そうだったんだ……。でも、全国大会に行くだけでもすごいと思



うよ」

「そう言ってくれると嬉しいな。あ、そろそろ集合みたいだね。それじゃあね！」

そう言つて、宇都宮さんは行つてしまった。思えば、このクラスになつてから初めてまともに会話をした気がする。僕はゆっくりと集合場所に向かつて歩きながら、このクラスでもなんとかやっていけるかもしれないな、と少しだけ思った。

3

明るい性格、はきはきとした態度、抜群の運動神経。そういった僕には無いものを、宇都宮さんはすべて持っている。しかも彼女は、格好悪く転んだ僕のことを優しく助けてくれたのだ。

あのとき、僕は宇都宮さんのことを初めて間近で見た。女子としては背が高く、だいたい僕と同じ一六〇センチくらいあったと思う。髪はまつすぐに、肩にかかるくらいのセミロング。目は二重で大きく、同い年なのどこか大人っぽい感じの人だった。

あれから僕は、宇都宮さんのことがずっと気になっていた。好きになった、というのは少し違う。この感情は、どちらかというと憧れに近いものだった。

新学期の開始から一週間ほどが経ち、ホームルームの時間に席替えが行われることとなった。これまでは出席番号順の座席で、僕は宇都宮さんの隣だった。

最初は教室でだれも話し相手がいなかった僕だが、この一週間で宇都宮さんとは少し話せるようになったし、他の人とも自然に挨拶を交わすくらいはできるようになった。おそらく、体育で転んだときに宇都宮さんが助けてくれなければ、僕はまだ誰とも話せないままだっただろう。

席替えはクジ引きで行われた。結果、僕は前から二番目の真ん中のあたり、宇都宮さんは窓側の一番後ろとなり、かなり離れてしまった。僕の周りは、前の席が吉良君、後ろが本山君、隣が河野さんだった。一学期の間は、ずっとこの席で過ごすことになる。

「なあ、一条、だっけ？」

荷物をまとめて新しい席に移動しようとしていたところで、僕は突然後ろから名前を呼ばれた。振り返ると、そこには吉良君が立っていた。

「席、替わってくんね？ 一番前の真ん中とかマジ最悪だし」

吉良君は荷物をまとめながら、僕にそう話しかけてきた。思えば、吉良君とはずっと席が近かったのに、まともに話したことは一度も無かった。席が近いので挨拶はするようにしていたが、彼は大抵自分の友達との話に夢中で、目もあわせずに適当に返されるのが関の山だった。そんな吉良君に話しかけられたので、僕は言葉に詰まった。

「で、でも……」

「なんで？ お前マジメそうだからいいじゃん。一番前でもさ」

「いや、でも……。クジで決めたことだし、勝手に席替わるのって、良くないんじゃない？ それに……」

それに、僕だって前から二番目だからそんなに変わらないよ、と言おうとしたところで、吉良君は急に大きな声を出して僕の言葉を遮った。

「なんだよ！ 話のわかんねえヤツだな！」

彼はそう言うと、自分の荷物を持って一番前の席へと向かい、機嫌悪そうにドスツと音を立てて座った。

最悪だ、と僕は思った。吉良君は最初に会ったときからあまり僕に好意的ではなかったが、こんなにすぐ怒る人だとは思わなかった。これから三ヶ月近くこの席のままだというのに、僕は毎日、彼の機嫌の悪そうな背中中に怖々としながら過ごさなければならぬのだろ  
うか。

僕はまた憂鬱になった。だがこの気持ちは、始業式の日に感じた先が見えないがゆえの不安とは違う。もっと現実的な、この先の学校生活に対する失望にも似た気持ちだった。

4

あの席替えの日以来、僕の学校への足取りは重くなる一方だった。吉良君はあれから、あからさまに僕に嫌がらせをするようになった。例えば、昨日は僕が歩いているときに足を引っ掛けて、転んだ僕を見て笑っていた。この前は、僕が休み時間に予習をしているときに、突然僕のシャープペンを取り上げて窓の外に放り投げてしまった。僕が怒ると、彼はとても嬉しそうに笑った。僕は仕方なく昼休みにそのシャープペンを探しに行ったが、落ちた衝撃で折れて使い物にならなくなっていた。

こうした一連の行動は、あのとき僕が席を替えてあげなかったことを根に持っしてしているというよりは、僕への嫌がらせで鬱憤を晴らすことを目的としているような感じだった。吉良君が鬱憤を溜め込んでいるのは、彼が去年陸上部を辞めたことと何か関係があるのかもしれない。

だが、そんなことは僕にとってはどうでも良いことだった。要は、彼は特別僕のことを憎いというわけではなく、僕が弱くて安全な人間だからこうした行動をとっているのだ。僕は、この感じが堪らなく嫌だった。

今日の五時間目はホームルームだった。昼休みの終了を告げるチャイムが鳴ると、間髪いれずに先生が教室に入ってきた。すると、それまでざわついていた教室が静かになり、それから先生が今日の議題について話し始めた。

「今日のホームルームでは、修学旅行のことについて話し合うぞ。じゃ、まずは班決めからやるか！ 決め方はどうする？ クジにす

るか、それとも……」

「先生！ 俺、クジは嫌ですよ！」

先生が何か言いかけたところで、窓際の席から長曾部君が不満の声を上げた。彼はサッカー部のエース的存在で、校内ではちょっとした有名人である。人気者である彼の発言がきっかけとなって、他の生徒たちも次々と不満を漏らし始めた。しかし、先生はそれに怒ることも無く、逆に生徒たちに質問した。

「じゃあ、みんなはどんな決め方にしたいんだ？」

「うーん、やっぱり適当に話し合って好きな人同士で班作るってことでいいんじゃない？ な、みんな！」

長曾部君のその発言に、殆どの生徒は賛成の意を示した。先生はその様子を見て、決まったな、というような表情で話し始めた。

「じゃ、それでいいな。班は六人で、男女別だぞ。このクラスは男女それぞれ十八人ずつの三十六人だから、余りは出ないよな。それじゃ、先生はちょっと職員室戻ってるから、その間に決めとけよ」

そう言って、先生はそそくさと教室から出て行ってしまった。生徒たちは瞬く間に席を立ち、仲の良い者同士で固まり始める。僕はあわてて周囲を見渡したが、クラスにこれといった友達がいなかった。僕は気軽に入れそうなグループなど無かった。

僕はそれぞれの男子グループの人数を数えることにした。まず目についたのは、窓際で固まっている長曾部君たちのグループだった。人数はちょうど六人。長曾部君をはじめとして、運動神経が良くて人気があるクラスの中心的人物が集まっていた。

次に僕が目をやったのは、教室の廊下側に集まっているグループだった。メンバーは、このクラスの中では比較的大人しそうな人たちで構成されているようだった。このグループなら今からでも馴染めるかもしれないと思ったが、人数を数えてみるとちょうど六人だった。僕はあきらめて、残りの一つのグループに視線を移した。

僕が最後に目をやったグループには、吉良君がいた。恐る恐る人数を数えてみると、やはり五人しかいない。前の二つのグループが

ちょうど六人ずつだったのだから当然である。今更人数がそろっているグループに入っていくよりは、吉良君のグループに入るのが筋だろう。だが僕はどうしても、自分から吉良君たちに声をかける気にはなれなかった。

僕が考えあぐねて席に座っていると、先生が職員室から帰ってきた。先生は、僕を見るなりやや怒気を含んだような調子で話しかけてきた。

「なんだ、一条。まだグループ決まってるのか。先生が職員室行ってる間に決めとけて言っただろ」

「す、すみません……」

「仕方ないな。おーい！ 男子！ 一条がまだ入るグループ決まってるみたいだから、どっか入れてやってくれないかー？」

僕が謝ると、先生は急にクラス全体に向かって話し始めた。僕はまるで晒し者にされたような気分になる。

「ん？ 吉良のこのグループ、五人しかないな。一条、そのグループ入れ。いいな」

「え、あ、はい」

先生の有無を言わせぬ発言に、僕は従うしかなかった。

後ろで固まっている吉良君たちの方を見ると、五人と同時に目が合った。全員、白けた表情で僕を見ている。僕は体が凍りついたような感じになり、吉良君たちを見たまま動けなくなった。

「よし、じゃあみんな席に戻れよー」

先生の発言に、僕ははっとして前に向き直す。少しして、吉良君が席に戻るために後ろから近づいてくるのが分かった。クラスの喧騒の中でも、彼の足音だけがはっきりと聞こえてくる。僕は感情の無い人形のように、まっすぐ前を向いて硬直した。足音が一步一步近づいてくる。吉良君は僕のすぐ横を通り過ぎて、荒っぽくいすを引いて座った。

クラス全員が席に着くと、先生は日程や持ち物について連絡し、

プリントを何枚か配布した。吉良君は後ろを向かず、手だけを後ろにやって僕にプリントを渡した。

この日はそのまま帰りのホームルームが行われて解散となった。僕は帰りの挨拶が終わるや否や、逃げるようにして教室を立ち去った。

5

今日は朝から雨が降っていた。外の薄暗さと蛍光灯の明るさで、教室の中は雨の日に特有の雰囲気となっている。

「なあ、一条。ワークの宿題写させるよ」

僕が一時間目の国語の授業の準備をしていると、吉良君が僕に命令口調でそう言った。どうやら、彼は前回の授業で出された宿題をやっていないかったらしい。

だが、僕は宿題を写すなどという姑息な行為の片棒を担ぐ気にはなれなかったので、適当に言い訳を取り繕って彼の頼みを断ることにした。

「でも、もう授業が始まるまで十分も無いから、今からじゃ写しても間に合わないと思うけど……」

「いいから早く見せろって!」

吉良君は突然声を荒げ、僕のワークを奪い取った。こうした彼の横暴な振る舞いには内心いつも腹が立っていたが、だからといってそれを制止する程の勇氣は僕には無かった。喧嘩になることが怖かったのだ。

僕が慌しく宿題を写す吉良君の背中を睨み付けていると、予期したとおり彼が宿題を写し終える前に国語の先生が教室に入ってきた。「なあにやってるんだ、吉良」

先生は明らかに怒気を含んだ低い声で、吉良君を上から見下ろしながらそう言った。吉良君は宿題を写す手を止め、一瞬だけ先生のほうを見上げた後に再び下を向いた。

「素直に宿題を忘れたと言うならまだしも、人の宿題を写して楽しようだなんて、そんなことが許されると思ったか！」

今度は怒鳴りつけるように先生が言った。吉良君は下を向いたまま、謝る様子は無い。

「おい！ 聞いてんのか！」

先生の怒鳴り声はさらに大きくなる。教室全体が緊張に包まれた。「……ところで、こいつにワーク見せたのは誰だ？」

先生はやや落ち着きを取り戻した声で、教室全体を見渡しながらそう言った。僕は静かに右手を挙げた。

「ん？ 一条か。お前もどうしてそんなことしたんだ」  
チャンスだ、と僕は思った。

「それは、吉良君が」

自分の名前が出たことに驚いたのか、吉良君は慌てて振り返り僕のことを睨み付ける。しかし、先生がいるということもあり恐怖は感じなかった。

「吉良君が、僕に宿題を写させると言って」

吉良君がさらに強く睨み付けた。僕はかまわず続ける。

「無理矢理僕のワークを取ったからです」

吉良君の目が大きく見開かれた。

「本当なのか？」

先生の問いかけに対し、吉良君は否定も肯定もしなかった。

「他に誰か見ていた奴はいないのか？」

先生は教室全体を見渡しながらそう言った。生徒たちは皆一様に先生から目をそらし、誰も答えようとはしない。この様子に先生は再び怒り出し、クラス全体に対して説教を始めた。

先生の説教は三十分ほど続き、それから通常の授業が再開された。吉良君はその間ずっと俯いていた。吉良君が職員室かどこかで個別に説教されることを期待していた僕は、少し拍子抜けした。

授業は重苦しい空気の中続けられた。いつもは積極的に生徒に発

言を促す先生も、今日は淡々と板書をするのみだった。

授業の終了を知らせるチャイムが鳴り、先生が無言で教室を出て行った、まさにその時だった。

「ざっけんなよ！ 一条！」

吉良君が突然ガタンと大きな音を立てて立ち上がり、振り返ったかと思うと机越しに僕の胸倉をつかんできた。目が血走っている。いつもとは明らかに様子が違った。

「な、何するんだよ！」

僕も反射的に声を上げる。

「うるせえ！ 一条のクセに調子こいてんじゃねえ！」

吉良君はそう叫ぶと、胸倉をつかんでいた右手を離し、拳を作って僕に思い切り振り下ろした。次の瞬間、僕は左頬に強い衝撃を受けたかと思うと、椅子から転げ落ちて床に倒れこんだ。吉良君は間髪いれず僕に馬乗りになり、必死の形相で何か叫びながら僕の顔を何発か殴った。

突然殴られた驚きと痛み、そして吉良君の怒鳴り声と狂ったような顔に対する恐怖とで、僕は思わず泣き出してしまった。我慢しようとしても、嗚咽と涙が止まらない。

吉良君はそんな僕の様子を見て少し落ち着いたらしく、いつもの嫌な感じの笑いの表情に戻った。それからおもむろに立ち上がって、クラスの皆に向かって大声で話し始めた。

「おい、こいつ中三にもなつて教室で泣いてやがるぜ！ キメーな！ このチクリ魔！」

吉良君がそう言うと、生徒たちは冷ややかな視線で僕と吉良君の方を見た。その中には宇都宮さんの姿もあった。宇都宮さんは僕を一瞥して、それからすぐに友人との会話に戻った。僕は吉良君の罵声と生徒たちの視線に耐えられず、立ち上がるなり鞆を持って教室から抜け出した。

僕は泣きじやくりながら廊下を走った。廊下に出ていた生徒たち



は奇異の目で僕のことを見てきたが、それを気にする余裕など無い。僕は玄関に着くなり靴を履き替えて、傘もささずに外に飛び出した。僕はびしょ濡れになりながら、行く当ても無くただ学校から離れるためだけに走った。

この日、僕は初めて授業をさぼった。明日は修学旅行の出発日である。僕は誰もいない公園のベンチで時間をつぶしながら、このまま風邪でもひいて修学旅行に行けなくなればいいと思った。

6

翌朝目が覚めると、期待に反して体調はすこぶる良好だった。僕の気持ちをよそに空は晴れ上がり、もうすっかり初夏の様相を呈している。

僕は一応前日に準備しておいた大きめの旅行鞆を肩にかけ、渋々ながら家を出た。流石に修学旅行をさぼるわけにはいかないし、四日間寝食を共にすることで少しは吉良君たちと仲良くなれるのではないかという淡い期待も抱いていた。

この日は学校ではなく、最寄の駅に集合することになっていた。僕が駅の待合室に着くと、皆は班ごとに固まって談笑していた。まだ集合時間には余裕があるというのに、班のメンバーは僕以外の全員が既に来ている。当然、僕が入り込めるような雰囲気ではない。僕は見つからないように注意しながら、柱の陰になっている椅子に座って時間が来るのを待つことにした。

数分後、木下先生が前に出てきて班ごとに整列するように指示した。僕はこっそりと自分の班の一番後ろに並ぼうとしたが、先生は僕を見るなり前に出てくるように言った。

「お前、どうして昨日勝手に帰ったりしたんだ！」

僕が先生のところに行くと、先生は皆にも聞こえるような大きな声で僕を怒鳴りつけた。

「みんなも心配してたんだぞ！」

先生はそう言ったが、皆は何かこそと話をしながら、冷やかな目でこちらを見ている。とても心配していたようには見えな  
い。

「す、すみません……」

僕は半ば泣きそうになりながら謝った。

「……何があつたか知らないが、男なら自分の力で解決してみろ。  
じゃ、戻っていいぞ」

先生は何やら誇らしげな顔でそう言った。僕は下を向いて他の生徒と目を合わせないようにしながら、静かに列の最後尾に戻った。程なくして一人一人に切符が配られ、ホームに出ることになった。全員がホームに出たところで、先生が列車内では出席番号順に座るようにと指示した。ということは、僕は吉良君の隣で三時間ほど過ごさなければならぬということだ。

しばらくして、ホームに特急列車が進入してきた。列車が停車すると、一組から順に生徒たちがぞろぞろと車内に入っていくた。僕らもそれに続いて車内に入り、指定された座席に座った。二つ並んだ座席のうち、僕が窓側で吉良君が廊下側だった。僕らの後ろの二人は座席を反転させ、もう一つ後ろの座席の人と向かい合わせにして座った。ほどなくして車内は話し声に包まれた。車内で声を発していないのは、僕ら二人だけのように思われた。

列車が発車すると、先生が前に出てきて今日の日程に関する説明を始めた。今日は目的の駅に到着したら、そのまま班ごとに自由行動をするということだった。旅館に戻るのは午後六時ということらしい。

「自由行動のとき、お前だけ別行動な」

先生が説明を終えて席に戻ると、吉良君は僕にだけ聞こえるような声でそう言った。

「お前と一緒にマジ最悪だし、少しは人の迷惑考えろよな」

班行動という決まりを破るのは良くないことだと思っただ、だからといってここで反論すると昨日のようにまた殴られるかもしれない。三日間も一緒に過ごさなければならぬということを考えるところで波風を立てるのは得策ではないと思われたので、僕は仕方なく吉良君に同意した。

それから会話らしい会話も無く、僕はずっと窓の外の流れる景色を見ていた。初夏の農村部の風景は、少しだけ僕の気持ちを落ち着かせてくれるような気がした。

そうこうしているうちに、列車は目的の駅に到着した。僕らは先生の指示でホームに降り、クラスごとに整列して駅の外に出た。外の空気は僕らの街と比べてかなり暖かく、南に来たということを実感させる。先生は再び前に出てきて今日の旅館の場所と集合時間を確認した後、班行動を守るようにと念を押して自由行動の開始を告げた。すると、吉良君は先生の目の付かないところまで一緒に来るようにと僕に耳打ちした。彼も結局は先生に怒られることが怖いのだろう。

駅前のデパートに入ったところで、僕は吉良君たちと別れた。吉良君たちは周囲に先生がいないか注意して見回しながら、怯えるような様子で建物の外に出ていった。僕はその後ろ姿を見て、そんな彼らにも逆らうことの出来ない自分が情けなくなった。

僕は側にあつたベンチに腰掛け、行きたいと思っていた場所をメモしたノートを取り出した。歴史が好きだった僕は史跡や歴史的建造物を巡るルートを計画していたが、吉良君たちと一緒にでは行くのは無理だろうと考えていた。しかし、状況がこうなった以上は僕も好きに行動しても罰は当たらないだろう。

僕は立ち上がり、デパートを出てバスに乗った。バスは二十分ほどで目的地に到着した。バスから降りて周囲を見渡すと、古い教会や洋館などがひしめくように建っている。よく見ると、道路もアス

ファルトではなく石畳である。歴史の短い僕の街では見られない光景を目の当たりにして、僕はこれまでの嫌なことを少し忘れられそうな気がした。

僕は街並みを見て回ったり、開放されている教会の中を見学したりして、しばしの間散策を楽しんだ。それから今度は路面電車に乗って、幕末の頃に激しい戦いがあったという城跡へと向かうことにした。

幸いにして、路面電車の中では先生にも他の生徒にも会わなかった。三十分ほどして、路面電車は城跡の近くの電停に到着した。先程とは打って変わって、周囲には古めかしい和風の家屋が立ち並んでいた。僕は路面電車から降り、目的の城跡へと向かう。

何分か歩いて、復元中の城門が建物の間から見え始めた頃だった。表通りから右に少し入った路地の辺りから、何人かの男女の声が聞こえた。女の人の声は、何か嫌がっているような感じである。観光地とはいえ、平日の昼間なので路地の人通りは少ない。心配になった僕は、建物の影からこっそりと路地の様子を覗いてみた。

驚いたことに、そこにいたのは宇都宮さん達の班だった。彼女らの前には、後姿だけでそれとわかる不良風の三人組の男が立っている。おそらく宇都宮さん達は、自由行動の最中にあの男達によってこの路地に連れ込まれたのだろう。携帯電話を持っていない僕は、周囲を見渡して公衆電話を探した。

その時、突然宇都宮さんの悲鳴が聞こえてきた。僕が慌てて振り返ると、三人の男が宇都宮さんに乱暴をしようとしているところだった。

考えるより先に足が動いた。気が付くと僕は、男のうちの一人に体当たりをかましていた。僕とその男は、共に勢いよく床に倒れこむ。宇都宮さんはその隙に男達から離れたようだった。

「い、一条君……！」

「何やってんのナツミ、逃げるよ！」

一緒にいた女子が宇都宮さんの名前を呼び、彼女の手を引いて駆

け出した。他の女子もそれに続いて走って逃げていく。宇都宮さんは手を引かれて走りながらも、路地を出るまで後ろを向いて僕のことを心配そうに見続けていた。

「つててて……。つたく、このクソガキ！ テメエのせいで逃げられちまったじゃねえかよ！」

少しして倒れていた男が起き上がり、ドスのきいた声でそう言った。「おい！ どうしてくれんだあ？」

先程は呆気にと取られていた他の男も、我に帰った様子で言った。良く見ると、この男達は僕よりもかなり年上らしかった。おそらく高校を卒業したくらいだろう。

「こりゃあ、ボコるしかねえだろ」

「そーだな。あー、マジムカツク！」

そう言うつと三人の男は、拳をバキバキと鳴らしながら僕に近づいてきた。おそらく、僕を怖がらせて反応を楽しむために、わざとやっているのだろう。吉良君が僕を殴ったときは違い、この男達は余裕に満ち溢れていた。僕は逃げようとしたが、僕が体当たりをした男が左手で髪を掴んだので、痛くて動けなくなってしまった。

次の瞬間、男は拳を大きく後ろに引いたかと思うと、僕の鼻柱を目掛けて勢い良く突き出してきた。僕は拳が鼻に当たる寸前で何とか横を向き、鼻への直撃を免れた。だがあまりの衝撃に立っていらなくななり、僕は床に倒れこんでしまう。それから、もう一人の男が間髪入れずに僕の腹を目掛けて蹴りを入れた。尖った革靴が突き刺さり、僕は口から胃液を吐き出した。

それから何発かの蹴りに見舞われた後、僕が体当たりした男は僕を無理矢理うつ伏せにし、足で押さえつけた。

僕にはもう抵抗する気力が無かった。男は足で僕の背中を押さえつけたまま、僕の左腕を掴んだ。僕はこれから何をされるか気づき、恐怖のあまり叫び声をあげて暴れた。しかし既にもう一人の男が僕の脚を押さえつけており、僕は身動きがとれなくなっていた。腕を

掴んだ男はそのまま左腕を頭の方に徐々に動かしていく。

「オラァッ！ どうだ！ 痛いか！」

「うつつ……」

腕が肩の真上を通り過ぎたあたりで、骨が鈍い音を鳴らした。僕は声にならない悲鳴を上げて、そのまま気を失った。

7

気が付くと、僕はベッドの上に寝ていた。左腕と右脚が固定されており、さらに体中がヒリヒリと痛む。目を開けると、僕の手を握っている母の姿が見えた。母は、僕が目覚めたことに気づいて声を上げた。

「兼太！ 気が付いたの？ どこか変なところはない？」

母の大きな声を聴いて、だいぶ意識がはつきりとしてきた。暗くてよく分からないが、どうやらここは病院の一室らしい。少しして、騒ぎを聞きつけた看護師が部屋に入ってきた。

「看護師さん！ 息子は、兼太は大丈夫なんですか？」

「ええ。先生が先程説明したとおり、頭や内臓は何も損傷していませんから、命に別状はありませんし何か後遺症が残るということもありません。ですが、左腕と右脚が完全に折れてしまっています。しばらくは入院しないといけません。今日はもう遅いですから、詳しいことは明日話しましょう」

「そうですか……。ありがとうございます」

「いえ、それではおやすみなさい」

看護師そう言って、静かに退室した。

「兼太。あなた、運ばれてきたときは酷い状態だったのよ。体中傷だらけで……。助かって本当に良かったわ！ それにしても、お父さんったら兼太がこんなことになったのに病院に来ないなんて、何考えてるのかしら！」

母は声を荒げて言う。

「出張中だから仕方ないんじゃないの？ 連絡くらいはくれたんでしょ？」

「そうだけど……。だからってあの人、家族と仕事、どっちが大事だと思ってるのよ！」

家族を養うために仕事をしているんじゃないかと言いたくなったが、ここで言い争っても仕方ないと考えて言葉を吞んだ。

「……ねえ、ここ個室みたいだけど、だからってあんまり騒ぐと他の患者さんに迷惑なんじゃない？」

「あ！ そうね、ごめんなさい。また明日ゆっくり話しましょう。それじゃおやすみ」

「うん……。おやすみなさい」

そう言って、僕は再び目を閉じた。

翌朝、僕が味気の無い病院食を食べ終わると、程なくして医師が病室に入ってきた。彼は母に軽く会釈した後、僕のベッドのそばにある椅子に腰掛けた。そして、僕の病状と今後の予定について説明を始めた。

彼の説明によると、全身の傷と打撲は二週間ほどで治るものの、骨折の完治には三ヶ月を要することだった。また、自宅から遠く離れたこの街で入院するのは大変だということで、僕の住んでいる街の病院を紹介してくれた。

「とは言いましても、ケガの状態から考えて今日明日の移動は無理でしょうから、あちらに戻るのは明後日以降ということになります  
が……」

「わかりました。ありがとうございます、先生」

「いえ。では、向こうには私から連絡しておきます」

医師はそう言つと、静かに病室から出て行った。

その日の午後、担任の木下先生が病室にやってきた。先生は僕を見つけるなり駆け寄ってきて、大きな声で大丈夫かと言った。それ

から、どうして規則を破ってひとりで行動したのかと訊いてきたので、僕は吉良君たちにそうするように言われたのだと答えた。すると先生は突然怒り出し、人の所為にするな、友達を売るような真似は人として最低だ、もっと自己主張をしな等、的外れなことを次々と言った。傍にいた母は先生に対して抗議しようとしたが、彼は言い終わるなりすぐに病室を出て行ってしまった。

僕には彼の言動の意図が全く理解できなかった。僕を心配しているような様子を見せたかと思えば、突然理不尽なことを言い出して、反論も聞かずにすぐに帰ってしまったのだ。一体、僕のことをどう思っているのだろうか。僕はそんなことを考えながら、また眠りについた。

目を覚ますと、窓の外の風景は既に紅く染まり始めていた。母の姿は無い。おそらく売店にでも行っているのだろう。

数分後、面会時間終了間際になって、突然病室のドアがノックされた。母は入るときにいちいちノックなどしないから、これは来客だろう。この街に知り合いは居ないはずなのに、一体誰だろうか？

「……どうぞ」

僕がそう言つと、ドアが開いて人が入ってきた。驚いたことに、入ってきたのは長曾部君だった。

「ごめんな、遅くなっちゃって……。なかなか先生の許可がとれなくてさ」

「長曾部君……。わざわざ、どうしたの？」

「えつとな……。一条に、お礼を言いたくて」

長曾部君に感謝されるようなことをした覚えは無い。

「……どういうこと？」

「あ、そうか。一条は知らなかったんだ」

「え？ 何を？」

「いや、俺と宇都宮、付き合ってるんだ。俺の大切な恋人を変な男から守ってくれて、本当にありがとう！」



「えっ？」

僕は驚きのあまり、思わず声を上げた。

「ああ。部活の帰りとか、結構一緒に歩いたりしてるからみんな知ってるかと思ってたけど……。そっか、一条は帰宅部だから気づかなかったのかな」

部活帰りに一緒に歩く二人を想像する。そこには僕が入り込む余地など全く無いように思えた。

「本当はアイツと一緒に来ようと思ったんだけど、アイツ、お前に合わせる顔が無いって……」

もう、彼の話は殆ど頭に入らない。

「おっと、もう戻らなきゃ。バスに乗り遅れちゃう。それじゃ、早くケガ治せよ！」

彼はそう言って病室から去っていった。直後に母が入ってきたが、僕は眠ったふりをした。

8

数日後、僕は地元の病院に移った。病室はまた個室で、入院に掛かる費用のことを考えると両親に少し申し訳なくなった。

母は泊り込んでも良いと言っていたが、それは流石に断った。そんなことをしたら絶対に体力が持たないだろうし、それでなくても忙しい父と過ごす時間がさらに少なくなってしまうのは、良くないと思ったからだ。

その日の夜、面会時間が終わる頃に木下先生がやってきた。家に帰る準備をしていた母は、あからさまに不快そうな顔で先生を迎ええた。

先生の用件は、僕に暴行を働いた連中が逮捕されたということと、修学旅行中の怪我なので保険金が下りるということ、それから欠席日数が多くなると内申点が下がってしまうということだった。母は

クラスメートを守るために怪我をしたのだからその点を考慮すべきだと抗議したが、先生は一人だけを特別扱い出来ないと言った。母は更に何か言おうとしたが、先生は仕事があるということですぐに退室してしまった。

先生が帰った後、母は困り果てた顔になった。言われなくても理由は分かる。僕が住んでいる地域では、高校入試はペーパーテストの成績に内申点を加味されて合否が決まる。内申点が下がるということは、僕が目指していた地域でトップの公立進学校の合格は難しくなるということの意味していた。

「……でも、僕のやったことは間違つてなかったと思う」

僕は沈黙に耐えられなくなり、思わず口を開いた。

「ええ。母さん、もう少し先生にかけあってみる。あと、内申関係なく入れる私立の学校が無いか調べてみるわ」

「……わかった。ありがとう」

「それじゃ、そろそろ帰るわね。また明日来るわ」

そう言う母は、静かにドアを開けて病室から出て行った。

翌朝、僕が病院食を食べ終わると、若い感じの女性医師が病室に入ってきた。

「えっと、一条兼太君、だよな？」

その医師は、いきなり僕に話しかけてきた。

「はい。そうですけど……」

「お母さんは、今日はまだ来てないの？」

「ええ。もう少ししたら来ると思います」

「そう」

その医師は、ベッドの横に置いてある椅子に腰掛けた。

「私は大友って言います。一応、兼太君の担当の医師になったから、これから退院までよろしくね」

大友医師はそう言つて、僕に微笑みかけた。

「あ、はい。よろしくおねがいします」

「あの、さ。別に盗み聞きするつもりじゃなかったんだけど……」

「ああ、学校の出席のことですか」

「うん。おせっかいかもしれないけど、嫌じゃなかったらちよつとアドバイスをさせてもらっていい？」

「ええ。構いませんけど」

「えつとね、昔、私も似たようなことがあったのよ。まあ、私の場合は兼太君と違って自分から休んでただけだけど」

「そうなんですか」

「それでね、私も進学先に困ってたんだけど、そのとき先生がある学校を紹介してくれたの。首都圏の私立なんだけど、出席日数とか内申点とか全く見なくて、試験だけで合否を決めるのよ」

そう説明してから、彼女はその高校の名を口にした。それは、地方に住む僕でも名前くらいは聞いたことのある有名な進学校だった。「そんなとこ、僕に行けるんでしょうか」

「あなた、元々公立の進学校目指してたんでしょ。学校も行かなくていいんだし、今から本気出せば大丈夫よ。私も仕事があるから家庭教師とかは無理だけど、参考書紹介するくらいはできるわ」

彼女が言い終わったところで、母が病室に入ってきた。彼女は母に簡単に自己紹介をして、病室を出て行った。

僕は、母にその高校に行きたいということを言ってみた。合格が難しいことと、遠方での寮生活になるということで、最初は反対された。しかし、レベルを下げてまで地元の高校にこだわるよりは良いだろうということで、模試で合格圏内の成績を取ることを条件に何とか説得した。

それから、大友医師のアドバイスを受けながら自力で勉強を進めていった。一ヶ月ほどして、僕の骨折は完治までとはいかないまでも、松葉杖を使えば何とか歩ける状態にまで回復した。病院生活は食事が美味しくないこと以外は快適だったので、もうしばらく入院していてもいいかと思っただが、両親にかかる経済的・体力的負担

を考えるとそうもいかなかった。

退院してからも、この病院にはリハビリのため何度も通った。そのたびに大友医師には勉強の経過を報告した。そして、九月も終わりに近づいた頃、僕はようやく学校に戻ることとなった。

9

僕が学校に戻った時には、もう学校祭も合唱コンクールも終わっていた。真面目に受験勉強に励んでいる一部の生徒を除いて、教室はなんとも言えない気だるさと喪失感に満ちていた。

クラスの生徒たちは相変わらず僕に話しかけようとはしなかったが、それは以前のような軽蔑や無関心によるものではなかった。彼らはいつも怯えるような目で僕を遠巻きに見ながら、ひそひそと噂話をするようになった。この変化は、僕のちっぽけな自尊心を満足させるのに十分だった。

以前は頻繁に僕に嫌がらせをしていた吉良君も、あまり僕に関わろうとしなくなった。おかげで僕は快適に学校生活を過ごせるようになったが、今度は休み時間にはすることがないのでいつも勉強をした。入院中にかなり力をつけていたこともあり、模試の成績は回を重ねるごとに上がっていった。

宇都宮さんとは、学校に戻ってから一度も話していない。彼女は僕を避けているようだし、僕も何を話せば良いのか全く分からないのだ。代わりというわけではないが、長曾部君は少し僕に話しかけてくるようになった。だが、彼の話にはしばしば宇都宮さんとの惚気話が含まれていたので、僕は次第に辟易してまともに取り合わなくなつた。すると長曾部君もあまり話しかけてこなくなつたが、あと半年足らずで終わる人間関係なんて心底どうでもいいと僕は思った。以降は、殆ど誰とも会話することなく学校生活を送った。

10

それから数ヶ月経った。二月の中頃に、僕は無事に志望していた首都圏の私立進学校に合格を決めた。素行不良で合格取り消しになると困るので、合格後も一応学校には休まずに通った。

ある日の放課後、僕は大友医師に合格の報告をするために病院に行った。診療時間が終わった後、彼女は待合室にやって来た。

「一条君久しぶり！ ケガはもうすっかり良くなったみたいね。今日はどうしたの？」

「あの、高校受かったから、報告しようと思って……」

「本当！ 良かった！」

「先生のおかげです。今までありがとうございました」

「いや、私はちよつとヒントをあげただけ。努力したのは一条君よ」  
「でも、先生が居なかったらこの高校を受けようとさえしなかったと思います。きっと、何もやる気が起きずに腐ってたと思う」

「そうねえ……。ま、高校に入ったら全部リセットして、楽しく行きましょう！ それはそうと、勉強は大変になるわよ！ 私だって今は医者やってるけど、高校のときはいつも平均以下だったんだから」

「そうなんですか！」

「そう、だから頑張ってね！」

彼女はそう言つと、微笑みながら僕に握手を求めてきた。僕は少し戸惑いながら右手を差し出すと、彼女は強く握り返してきた。

11

ついに卒業式の前日の夜を迎えた。僕は引越し先の寮に送る荷物を整理してから、いつもより少し早めにベッドに入った。しかし、気持ちが高揚してなかなか寝付けなかった。

翌朝、僕はいつものように七時ちょうどに目を覚ました。ベッドから出てカーテンを開けると、もう三月だというのに外の空き地はまだ雪で真っ白だった。今年の春は遅いらしく、今日の最高気温も氷点下なのだという。

殆ど中身の入っていない鞆を背負い、僕は勢い良く外に飛び出した。空はやや曇りがかっていたが、雪面に反射する日光は思わず目を細めてしまうくらいに眩しかった。

学校に着くと、生徒達はいくつかのグループに分かれて談笑していた。しばらくすると先生が教室に入ってきて、今日の日程について説明した。それから校内放送が入り、卒業生は廊下に並ぶようにと指示された。生徒達は指示通り廊下に並んだが、この頃になると先程までの騒がしさは若干薄れ、廊下全体がしんみりとした雰囲気包まれた。

先生の指示で、僕らは体育館の入口の前にやってきた。数分後、ブラスバンドの演奏が聞こえてきたかと思うと、入口の扉が開けられて一組から順に卒業生の入場が始まった。

五組の番が来ると、木下先生は一步前に出て礼をしてから体育館の中に入ってしまった。在校生の拍手の中、僕も後に続いて入場した。少しして、長曾部君を呼ぶ在校生の黄色い声が聞こえてきた。他の生徒も、歩きながら部活の後輩などと言言二言交わしているようだった。部活をやっておらず、在校生に知り合いも居ない僕は、義務的な拍手の中を淡々と歩いて席へと向かった。

厳粛な雰囲気の中、式は滞りなく進められた。証書の授与や校長先生の話などが終わり、修学旅行や学校祭の模様を流すスライドが開始された。当然、僕が写っている写真は一枚もなかった。

二時間に及ぶ式のプログラムが全て終了し、ブラスバンドによる退場曲の演奏が始まった。周囲を見渡すと、何人かは既に涙を流しており、泣くのをこらえているような表情の生徒も数多くいた。一

方で僕は、嬉しさのあまり笑い出しそうになるのをこらえながら、在校生の拍手が鳴り響く体育館を後にした。

教室に戻った時には、クラスの半分くらいの生徒がさめざめと泣いていた。木下先生は全員に卒業アルバムを配布した後、教壇に立つてお別れの挨拶をした。それに対して生徒達は一様に拍手を送った。先生は解散を宣言し、それから生徒達は互いの卒業アルバムに寄せ書きを始めた。泣きながら抱き合う者、一緒に写真を撮る者、思い出話に花を咲かせる者など、教室内は途端ににぎやかな雰囲気となった。吉良君も宇都宮さんも、それぞれいつも一緒にいるグループで固まっていた。

そんな中、僕は顔に満面の笑みを浮かべて先生の前へと歩を進めた。先生は僕に握手を求めてきたが、僕はそれに応じず、深く一礼してから駆け足で教室を飛び出した。

学校を出ると、まだ外には誰も出ていなかった。直後に冷たい風が頬を撫で、僕は思わず立ち止まって身震いをする。学校の中からは、生徒達の話し声が微かに聞こえていた。

「一条君！ ちょっと待って！」

歩き始めた瞬間に突然後ろから声をかけられ、僕は首だけを回して振り向いた。そこにいたのは宇都宮さんだった。

「えっと……。今まできちんとお礼を言えなくてごめんなさい。あの時は、ホントにありがとう！」

宇都宮さんは微笑みながらそう言って、僕に向かって深々と礼をした。その可愛い仕草が、なぜか少し腹立たしく感じられた。

「いや、むしろ余計な心配をかけてごめん。あの場にいたのが長曾部君だったら、こんなことにならずに不良たちを格好良く倒したんだろうけど」

嫌な返し方だと自分でも思った。

「ナツミー！ 何やってんのー！」

教室の窓から、あの時宇都宮さんの手を引いて逃げた女子の声がした。

「戻りなよ。僕はもう帰るから」

「あ……、うん。なんかゴメンね」

「それじゃ」

僕はそう言つて、前に向き直つて歩き出した。腕時計を見ると針は正午を指しており、雪面に反射する光はより一層強くなっている。上を見上げると、そこには冬の晴れた日に独特の澄んだ青空が広がっていた。

少し歩いてから、僕は歩を止めて再び学校の方を振り返った。その時には、もう校門のところに宇都宮さんはいなかった。僕は周囲に誰もいないのを確認してから、校舎の三年五組の窓の部分を強く睨みつけ、息を深く吸い込んだ。

「バーカ！」

僕は力いっぱい大声でそう叫び、すぐに前を向いて氷点下の青空の下を全速力で家に向かって走り出した。

END



（後書き）

この小説に書かれている出来事というのは、誰しも一つか二つくらいは経験があるものなのかもしれません。

こんなお話ですが、読後感はあるだけ良くなるように工夫しました。ラストの開放感が上手く伝われば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9843e/>

---

氷点下の青空

2010年10月8日15時27分発行